



「狂犬病」撲滅の立役者

原田雪松

四宮義和

「狂犬病」と聞くと、医療関係者を除いた一般の方が受ける印象は——犬の病氣——とのイメージになると思いますが、実は人にも感染し、いったん発症したらほぼ100%死に至る、人と動物に共通に感染する恐ろしい病氣のことである。

狂犬病はすでに奈良時代には発生していたことがわける記述もあり、古くから日本国内に存在していたようである。昭和の時代に入っても多数の国内発生が確認され、多くの犠牲者を出しながらも、昭和30年代初頭には撲滅している。

現在では愛犬家が増えて、全国の飼い犬頭数は1200万頭余りと言われ、この愛犬家の一部には狂犬病予防注射不要論を唱える人たちもいる。しかし、現在でも多くの国々で犬での発生と人が咬まれたことによる狂犬病罹患死亡者が多数発生しており、国際化の進展の中で日本国内への新たな侵入・発生が心配されている。世界では、狂犬病清浄国は数少なく、日本はこの中に入っている。この狂犬病撲滅には狂犬病予防法制定が決め手となったが、本法律の制定に立役者として主役を演じたのは、当時衆議院議員で獣医師として臨床家であった原田雪松である。

狂犬病発生の歴史

狂犬病の発生起源は、記録から推察して古代ギリシャ時代、紀元4世紀ごろにはすでに狂犬病の症状を示す記載があるという。

日本での最初の史料は養老元年（717）に発布された「養老律令」にそれらしき記載があるが、平安時代になって刊行された『医心方』には狂犬病の記述があり、このころ、日本で最初の狂犬病が確認されたものと思われる。江戸時代に5代将軍綱吉の出した「生類憐れみの令」の内容から想定すると、捨て犬が増加し、その結果小流行があったものと考えられる。

明治中期には長崎地方で大流行し、末期には全国へ広がった記録がある。国は明治29年（1896）に「獣類伝染病予防規則」を改正して「獣疫予防法」を定め、本法に狂犬病を規定することで犬を追加し、大正11年（1922）には「獣疫予防法」を廃止して「家畜伝染病予防法」を制定、家畜とともに犬も含めた広範な法律とした。

大正14年（1925）「畜犬取締規則」を改正し、犬の登録の充実を図ったが、さらに本病がまん延し、多い年には1,000～3,000頭余りの発生が続いた。このころワクチンの基礎的研究が始まり、押田、梅野および近藤らにより実用化へ近づいていった。そ

して、獣疫予防法から家畜伝染病予防法に基づく予防接種が推進され、一定の効果をしめした。

昭和初期からは徐々に沈静化していたが、第二次世界大戦末期から終戦後にかけて再び本病が流行し、昭和19年（1944）には狂犬733頭、昭和25年（1950）には867頭、人への感染も54人と徐々に発生拡大が記録されている。このような社会不安が憂慮される中、昭和25年に原田雪松らの尽力により「狂犬病予防法」を制定、その後の発生は激減し、昭和31年（1956）の6頭の発生を最後に日本の「狂犬病」は撲滅されたのである。占領下での議

■ 昭和20年からの発生と終息状況

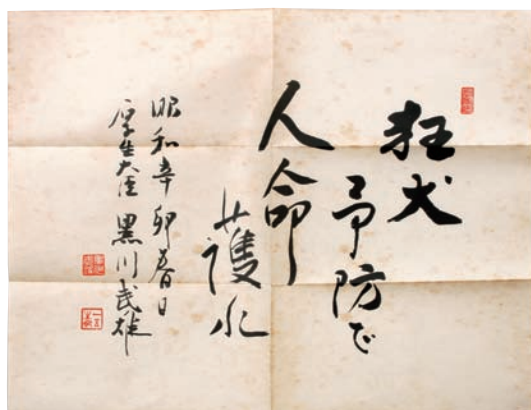
年次	犬の発生	人の発生	
昭和20	94	1	終戦
21	24	1	
22	37	17	
23	141	45	
24	614	76	
25	867	54	法制定
26	319	12	
27	232	4	
28	176	3	
29	98	1	
30	23	0	
31	6	1	
32	0	0	
合計	2,631	215	



「狂犬病」撲滅の立役者
原田雪松



原田雪松著『狂犬病予防読本』
全国の保健所、獣医師等に配布された。



『狂犬病予防読本』の各号の中に挟みこまれていた、
当時の厚生大臣直筆の賛辞の書。

員立法による法案成立の困難に加え、成立後短期間で国内の狂犬病を撲滅した先人たちの努力には、尊敬と感謝の念を禁じえない。

狂犬病とは

狂犬病は狂犬病ウイルス（ラブドウイルス科リッサウイルス属）を病原体とする人獣共通感染症であり、人を含めすべてのほ乳類が罹患する。

感染経路は一般的には感染した動物の咬み傷などから唾液とともにウイルスが伝染する場合が多く、傷口や目・唇などの粘膜部を舐められたりすると非常に危険である。感染源としての動物は国によって異なり、アジア・アフリカでは主に犬、アメリカやヨーロッパではキツネ・アライグマ・スカンク・コウモリなどの野生動物が媒介している。

症状は末梢神経を介して中枢神経組織に達し、さらに各神経組織へ伝わり、唾液腺で増殖する。潜伏期間は一定せず、平均1～2カ月であるが、時には数年、7年間の人での報告例もある。発病すると物事にきわめて過敏になり、狂騒状態となり、動物では目先のものすべてに咬みついたりする。その後、全身麻痺が起り、最後は昏睡状態となって死亡する。人の場合は、水を飲むときにその刺激で咽喉頭や全身の痙縮が起り、苦痛で水が飲めないことから「恐水症」とも呼ばれている。

予防にはワクチン接種が最も有効であり、特に犬への接種が予防効果大である。人では、流行地への旅行者、研究者、獣医師などに接種することが勧められている。本病は潜伏期間が長いので咬傷後、傷口を丁寧に洗浄し、ワクチンを接種することで発病を防ぐことができる。しかし、残念ながら現在でも、発病した人や動物の治療方法はない。特に動物の場合は迅速に診断し、隔離・殺処分により、まん延を防止することが重要である。

「狂犬病予防法」制定の道程

終戦後、連合国軍の統治の中、昭和23、4年と徐々に本病発生が増加し（表参照）、GHQ（連合国軍総司令部）の獣医課長ビーチウッド博士は事態を憂慮し、昭和25年3月6日付で「狂犬病予防対策について」と題した覚書を寄せてきた、と故田中良男（当時農林省技官）は、後に埼玉県獣医師会発行の「狂犬病の葉」に記している。このことから、農林省、厚生省両省の担当技官や課長レベルで原文が練られ、原田雪松は熊本・天草の臨床獣医師として現場のあつい思いと、衆議院議員に初当選してまだ1年たつやたたない時期であったことから、一念発憤したのは言うまでもない状況であったと思われる。「狂犬病予防法」は関係者との幾度とない綿密な打ち合わせを繰り返した後、第8回国会に議員立

法として原田雪松が提出、実感こもった迫力ある説明に、異例のスピードで昭和25年（1950）7月28日衆議院通過、同年7月31日参議院を通過、可決・成立した。

この予防法が成立するには「私利私欲を捨て、自費で日夜情熱を注ぎ誠に涙ぐましい努力の成果であった」、と当時の法案提出に草案を練った一人である農林省技官の小栗菊夫が、後に「原田先生の功績と遺徳を偲んで」の中で記していることから、原田雪松の——狂犬病撲滅への熱い情熱——が偲ばれる。

原田雪松の生まれた 熊本県天草島と風土

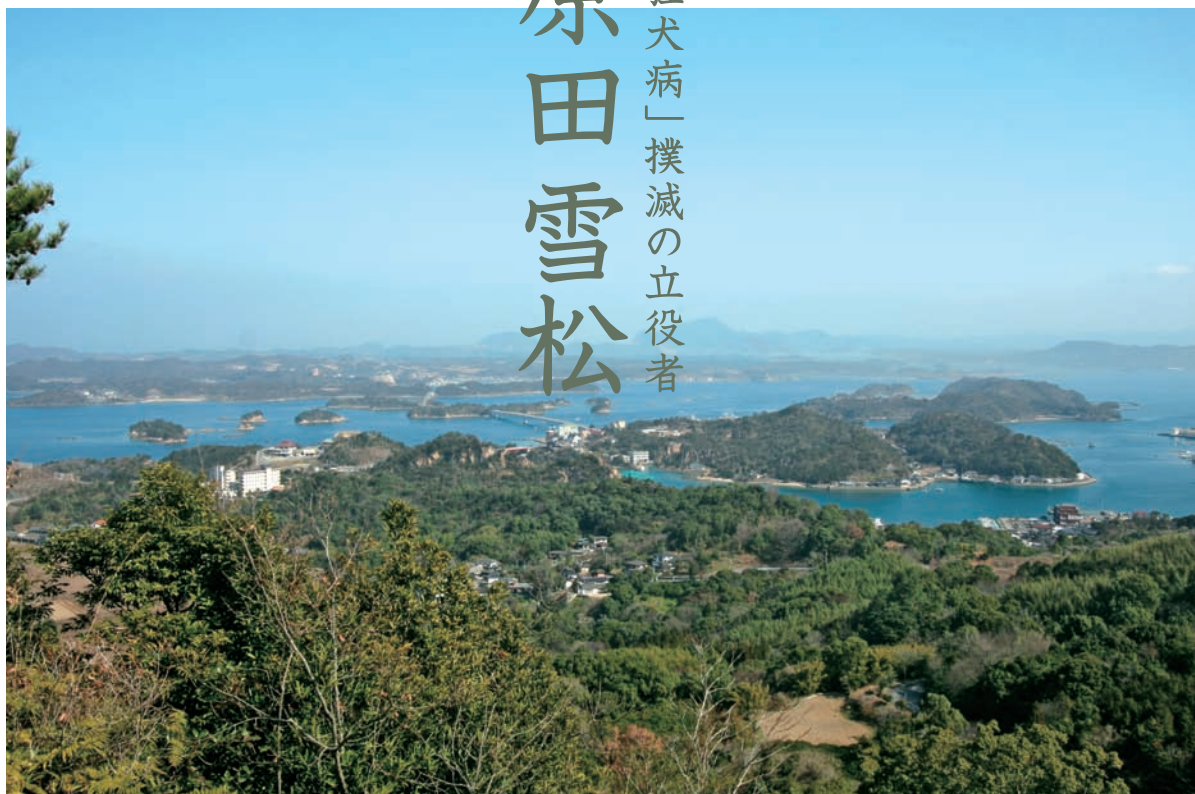
天草は大小120余りの島からなり、主な島は大矢野島、天草上島、天草下島で、東西48km、南北44km、全面積876.4平方km、淡路島の約1.5倍

の広さである。気候は平均気温16～17℃、平均雨量は1,800～2,200mlで温暖な海洋性気候の島々で構成されている。原田が活躍した時代の天草から熊本までの交通の便は、御領村から本渡港へ、本渡港から連絡船で三角港まで行き、列車で三角駅から熊本駅まで行くという、片道で約半日以上かかっていた。現在では昭和40年（1965）に、天草島民の悲願であった五橋が完成し、5つの橋で結ばれた天草パールラインと呼ばれる風光明媚な道路で、島々は九州本土と陸続きになった。現在約13万8千人の人びとが暮らしている。天草は夕日に映える西海岸のすばらしい自然景観や大江天主堂をはじめ、隠れキリシタンの島としての文化的遺産も数多く残されていることでも知られている。

原田の出身地でもある下島は、天草島のなかでも最も南に位置し、九州本土に近接しているものの、

原田雪松

「狂犬病」撲滅の立役者



千蔵山公園展望台から望む、天草五橋

島であったばかりでなく、歴史的にもキリスト教弾圧や重税に苦しみ、島原の乱が起こった時代背景も影響したと考えられる——信仰心の厚さ——や——隣人愛の思想——がはぐくまれ、犯罪が少なく、地域住民の性質は温順で、際だって人情味豊かであったと言われている。

生い立ちと人となり

原田雪松は、熊本県天草市楠浦町（旧本渡市楠浦）の地主原田家に明治21年（1888）5月27日に生まれ、当地で成長し、大正2年（1913）に日本獣医学校（現日本獣医生命科学大学、武蔵野市）を卒業した。原田雪松が地方村長から国会議員まで活躍した背景には、影響を与えた人物として7歳年上であった宮崎定夫の存在がある。宮崎定夫は御領村生まれで東京美術学校に学んだ画家であったが、後に地元の御

領村長、天草畜産組合長、県会議員となった。原田雪松の経歴から、宮崎と同じような道程を歩いていることは宮崎の勧めもあったと推測され、現本籍地である旧五和町御領に転居・永住したようである。

大正2年、大学卒業と同時に梅野信吉氏（夫人の兄の大学の先生、後に犬用狂犬病ワクチンの創製に貢献）の媒酌により、東京生まれ育ちの君子夫と結婚している。当時、君子夫人が熊本の離島天草まで嫁いできたことから、雪松が男性的魅力を持ち合わせていたことがうかがえる。大正15年（1926）には、一人娘潤子が誕生している。

原田の天草畜産農協当時の職員であった山下眞弓さんの話では、事務所へ出勤してもゆっくり書類に目を通す時間もないくらい忙しい日々が多く、職員への指示も実に無駄なく、明確でテキパキとした仕事ぶりであったらしい。原田を知る当時の関係者も



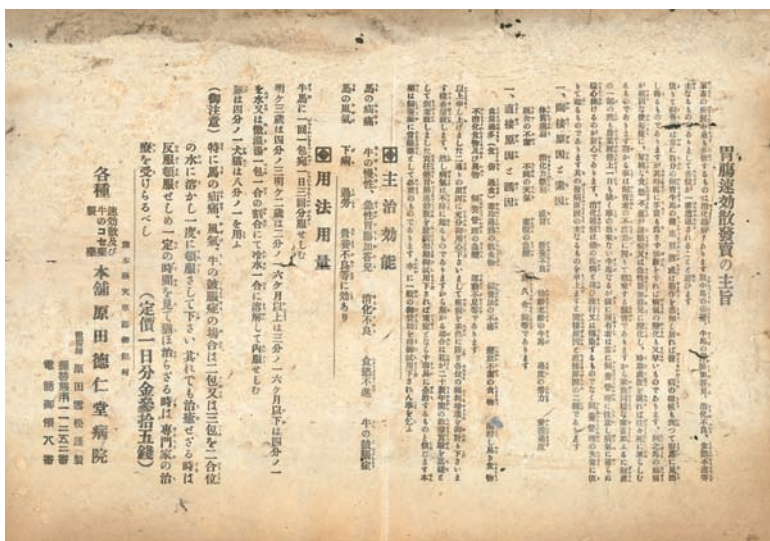
原田の人生に
多大な影響を与えた
宮崎定夫



現在の
天草畜産農業協同組合
(天草市佐伊津町 682)

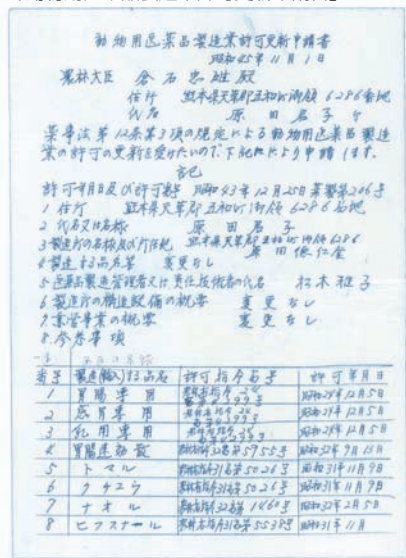


昭和5年ごろ。左から原田、潤子さん、君子夫人、岩崎見習生。



獣医師原田雪松謹製の動物用薬の案内。
当時の天草の地での動物用薬の開発・製造は、
重要な意味合いがあったに違いない。

君子夫人が申請した
「動物用医薬品製造業許可更新申請書」



すでに高齢であるが、この人たちの若いころは「代議士原田雪松」は、気さくな人であったにもかかわらず、威厳があり、近づき難く、雲の上の人であったようである。

一方、臨床家として若い時代から第一線で診療活動を行うと同時に、旺盛な探求心から、自らが使う治療薬も研究・開発し、「動物用医薬品製造業」も行っていた。製造していたものは四葉剤であったが、主に漢方胃腸薬で、名称は「胃腸速効散」、屋号は「原田徳仁堂」と称し、平成初期まで九州一円に広く愛用され、家畜の健康維持、改善を通じて地域産業の振興・発展に貢献していたのである。

現在も天草で暮らす娘の潤子さんは、「都会育ちの母は、幸せながらも東京の暮らしを懐かしんで、里帰りをすると長期間戻って来なかったり、田舎には無いいろいろなものを取り寄せたりしていた

ようです」と目を細めて語った。しかし君子夫人は、原田が亡くなった後も、その意志を継いで、晩年まで天草の自宅で製薬業を続けた。

地域振興活動

大正6年(1917)、御領村農会畜産技手、昭和12年(1937)には天草畜産組合嘱託技師として地域での診療や技術指導に当たり、戦時中は一時、県立天草農業高校で教鞭を執り、地域産業の主産業であった畜産業の振興に尽力するとともに、教育者の一翼も担っていた。



ひとり娘の潤子さん



獣医師の見習いに来ていた、阿蘇農業高校畜産科の卒業生たちと。自宅にて、大正 11 年 1 月撮影。



今も潤子さんが住む天草の自宅庭には、近年まで君子夫人が製菓を続けた建物が残っていた。



原田は、現在の「天草黒牛」の導入、育成にも大いに貢献した。

原田雪松

「狂犬病」撲滅の立役者

特に広い農地が少ない天草島では畜産業に頼るところが大きく、現在のブランド「天草黒牛」品種改良の基礎を築いたと史誌『天草の年輪』にも記されている。

昭和 21 年（1946）地元御領村の村長、昭和 22 年（1947）熊本県議会議員に当選、昭和 23 年（1948）に天草郡畜産農協の初代組合長、昭和 24 年（1949）には衆議院議員に当選するなど足早に上り詰めている。

国会議員としては自由党農村対策特別委員会畜産部長の要職に就き、農業・畜産関連法案などの立案に携わるなかで「狂犬病予防法」の立案に奔走した。当時の活躍分野は全国レベルの農業・畜産ばかりでなく、熊本大学化学血清薬研究所顧問（現財団法人化学及血清療法研究所）や熊本通運株式会社社長を勤めるなど幅広く地域産業の振興に活躍・貢献している。

昭和27年（1952）の総選挙において再出馬したが、保守同士の激しい三つどもえ選挙となり、惜しくも落選、参議院全国区にも挑戦したが、国会議員としては残念ながら一期だけの活躍であった。

狂犬病流行の現状

狂犬病予防法の施行により、①犬の登録、②予防接種の義務化、③野犬の捕獲・抑留、④検疫の強化等により昭和32年（1957）以降の発生がなくなり、日本国内からは撲滅され、原田雪松の情熱は実を結び、世界でも数少ない清浄国となった。

現在発生していない国、地域は日本、アイルランド、アイスランド、ハワイ、グアム、フィジー、ニュージーランドなどだが、世界保健機関（WHO）の発表（2005年）による世界での人の感染は55,000人以上に達しており、うち、インド、中国などのア

ジア地域が最も多く、次いでアフリカ地域、北米、南米、欧州などの順となっている。

犬の予防注射の現状と発生の危険性

「狂犬病予防法」では、生後91日令以上の犬を取得したら、30日以内に市町村長に登録申請するとともに、狂犬病予防注射を受けることが義務付けられている。

近年のペットブームにより飼育頭数は年々増加し、平成18年度（2006）厚生労働省の統計では663万5千頭余りに達していながら、予防注射頭数は491万頭余りで、予防接種率は74%となっている。

しかし、ペットフード工業会の発表している推計飼育頭数（室内犬を含む）は平成18年度約1,200万頭となっており、実質接種率は40.9%と推測される。この水準は伝染病予防上、きわめて危険な低

■ 原田雪松の年表

期 日	年	事 項
明治21年5月27日	1888	楠浦村（現 天草市本渡楠浦）生まれ
大正2年	1913	日本獣医学校（現 日本獣医生命科学大学）卒業
大正6年	1917	御領村農会技手
昭和4年	1929	天草郡獣医師会長
昭和12年	1937	天草畜産組合嘱託技師
昭和16年	1941	天草郡御領村議会議員
昭和21年	1946	天草郡御領村長
昭和22年	1947	熊本県議会議員当選
昭和23年	1948	天草畜産農業協同組合長、熊本県畜産販売農業協同組合連合会長
昭和24年～	1949	衆議院議員当選
		熊本県獣医師会初代会長、全国共済農協連合会副会長、全国畜産農協連合会副会長、日本獣医師会副会長、熊本大学化学血清薬研究所顧問、熊本通運株式会社社長など
昭和25年	1950	「狂犬病予防法」制定、獣医師法一部改正、家畜伝染病予防法一部改正、有畜農家創設維持法
昭和27年	1952	再出馬 天草三つどもえの激戦で落選
昭和35年9月2日	1960	「すい臓がん」により、71歳にて死亡
		従五位勲四等瑞宝章を叙勲

■ 代議士時代の主な立法

- 昭和24年 代議士初当選
自由党農林対策特別委員
会畜産部長として農林委員、厚生委員
- 昭和25年 狂犬病予防法の制定
家畜保健衛生所法施行
獣医師法一部改正
家畜改良増殖法制定
有畜農家創設維持法制定
- 昭和26年 家畜伝染病予防法一部改正
競馬法改正



い水準であり、WHO の免疫水準である接種率 70% 以上には程遠い実態である。この現状を関係者は大変憂慮しているところである。

国際化の進展するなかで、ヒト・モノすべてが世界中を駆けめぐる激しい往来があり、感染症はじめ狂犬病ウイルスの国内侵入も予断を許さない状況にあり、一部の愛犬家が「国内発生がないから安全だ」と、予防注射不要論を唱えていることは乱暴極まりない傾向である。本病に感染した場合の悲惨な状況を考えると、本病の性質と世界の現況を広報・啓発し、多数の国民へ正しい知識を普及する必要がある。

平成 18 年（2006）の外国帰国者の国内発症例を考慮にいれても、今後、国内への本病の侵入が危惧されることから、免疫水準向上のための啓発と、登録や予防接種の推進に自治体、関係機関の連携による組織的で円滑な推進がきわめて重要と思われる。

晩年

原田雪松は、昭和 27 年（1952）の衆議院議員を退席後は、暇をみつけて趣味の弓道や囲碁を楽しみながらも、天草畜産農協組合長をはじめ、本来の開業獣医師の業務に従事しながら数々の地元団体の責任者を務めていた。

やがて、すい臓がんの病魔に侵されながらも天草畜産農協組合長は最後まで務め上げ、昭和 35 年（1960）5 月 25 日、地域の関係者による胸像建立の式典には、正装の元気な姿をみせた。

「祖父は、私が小学校 6 年生の時に他界したため幼い記憶しか残っておりませんが、天草の地で自分の胸像を、存命中に建立していただいたことをたいへん喜んでおりました。すでに体力的にも相当衰えていましたが、お礼の言葉の中で、“笛吹けども人



衆議院議員時代。中央が原田、その右が君子夫人。



副会長を務めた日本獣医師会の建物前にて。撮影年未詳。



天草の生家庭にて。撮影年未詳。



作者の銅像が立っています。銅像の
下は、作者の銅像が立っているところ。



昭和36年10月、作者の銅像が立っているところ。銅像の下は、作者の銅像が立っているところ。

「狂犬病」撲滅の立役者 原田雪松

「何事でも成就させませんでした」と、周囲の方々に感謝の言葉を述べていたのが、新聞に載って残っています」と話す原田雪松氏も、関東戦隊として狂犬病予防法を完成する立場にある。その後、原田は日本戦隊協会（東京都豊島区荒川）の会館に知財で譲渡した譲渡して来る。

譲渡をめぐり争いながらも譲渡が完了した譲渡を完了した後、昭和36年（1961）9月2日、71歳の生涯を終えた。





原田の生家や墓所のある御領地区。天草市五和支所屋上より。



自宅近くにある原田家墓所



狂犬病予防接種をよびかけるポスター（2008年版）
先人たちの努力の賜物は、われわれ自身が引き継ぎ維持しなくてはならない。

「狂犬病予防法」制定は、動物や人の悲惨な狂犬病罹患のまん延を防いだばかりでなく、獣医療業務の社会的貢献の場を後生へ提供し、ひいては公衆衛生の向上に大きく寄与しており、原田雪松先生の功績を永く讃えるとともに、今後とも、この法律が継続的に十分機能し、公衆衛生の更なる向上を祈念するものである。

（獣医師・社団法人熊本県獣医師会事務局長）

【文献】

「狂犬病予防讀本」1951年3月 近藤正一監修 原田雪松著 三元社刊
「原田雪松先生の偉業を偲んで」昭和54年11月20日 社団法人日本獣医師会
「天草畜産70年史」1980年 天草畜産農業協同組合発行

「近代天草百年通史 天草島の年輪」, 井上重利著, みくに社発行, 1974年11月15日

「五和町史」五和町刊, 2002年12月25日発行

「衆議院会議録情報 第008回国会 厚生委員会第4号」

「衆議院会議録情報 第008回国会 厚生委員会第9号」

「日本獣医史学会第39号」, 日本獣医史学会発行, 2002年1月20日

「日本獣医公衆衛生学会講演 狂犬病」源 宣之著, 2004年

「日本における狂犬病の防疫」, 厚生省生活衛生局乳肉衛生課・社団法人日本獣医師会, 1997年

「世界における狂犬病の発生状況と日本が取るべき対策」, 厚生省・社団法人日本獣医師会, 1997年

「JVM 日本獣医畜産新報」, Vol 61, No 3, 2008

「東京狂犬病流行誌」狂犬病臨床研究会発行, 2007年2月15日

「熊本県獣医師会創立50周年記念誌」社団法人熊本県獣医師会刊, 1997年

「JVM 日本獣医畜産新報」, Vol 51, No 10, 2005